

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 19 日現在

機関番号：82709

研究種目：基盤研究(c)

研究期間：2008～2011

課題番号：20605018

研究課題名(和文)子どものための展示開発

- 自然史博物館にふさわしい展示と展示プラン -

研究課題名(英文)The development of exhibitions for children

--In the natural history museums--

研究代表者

大島 光春(OSHIMA MITSU HARU)

神奈川県立生命の星・地球博物館 主任学芸員

研究者番号：40260343

研究分野：古生物学 博物館学

科研費の分科・細目：06・9028

キーワード：子ども 自然史 展示 体験

1. 研究計画の概要

本研究では対象を特に“子ども”に絞って、展示という博物館がもっとも得意とするメディアを活用して、自然への興味を喚起する方法を研究し、自然史博物館にふさわしい展示を開発することを目的とする。子どもとフィールドとを結び、自然史科学への入り口となるような展示プランを作成して成果とする。

博物館における学習は、子どもの学習の主要な場である「学校」とは、非日常の場であること、学習を強制しない(学習者の主体性に負う)こと、学芸員は自然史の専門家で、必ずしも教育者ではないこと、対象を限定しないこと、などの点で異なる。

また、自然史博物館にふさわしい展示は、楽しさを求めた子ども博物館の展示や、理解することを優先した科学館の展示とは異なるはずである。それは、自然史博物館のバックグラウンドが自然(フィールド)であり、そこで行われる展示活動の目標は、見る人へ自然史の魅力を伝え、自然(フィールド)へ誘うことであるからだ。

自然から学芸員が子ども達に伝えたい“こと”や“もの”を選択することが本研究の初期の段階において、大変重要な作業になる。それらは自然の中、または自然と接するためにキーとなるような“こと”や“もの”で、切り取られて博物館の展示となっても、魅力的でなければならない。

研究代表者と分担者はそれぞれが得意とするフィールドから、自然の重要なキーとなる部分を切り取り、持ち寄り、仕掛けを仕込んだ展示案を創る。

試作品は主に特別展に併せて展示し、行動観察の手法で展示の有効性を評価し、必要であればインタビューを実施し、改良を重ねた。

本研究では予算の上からも、当館の状況からも、実際の展示を展示室に作り込むことはできないので、試作品と展示設計書あるいは展示計画書をもって、研究結果とする。

2. 研究の進捗状況

H20～22年度は海外を含めた、他館における先行事例の調査を実施した。展示のテーマや展示室の状況、展示品、装置について情報を収集し、効果を分析した。

H22～23年度からは、特別展で展示品・装置の一部を試作した。展示見学者の観察を主体にした、試作展示の評価を行い、インタビューやアンケート調査と合わせ、展示の効果を検討した。

H23年度は、特別展で展示品・装置の一部を試作する。平行して子どものための展示室全体の設計図と模型を作製する。

(1) 既存の子どもための展示の視察

博物館のジャンルを問わず、国内と北米、西欧の館園を視察した。それらの館で行われていた展示手法を大別すると、次のような物であった。古典的な手法：スタンブラリー、模型やジオラマには関心が高い。テクノロジーによる手法：CGを用い、各種センサーを備えた最新インターフェイスを駆使して、目新しさとおもしろさを追求するもの。ハンズオン展示：来館者に積極的に関わるかどうかは別として、インタープリターを配置し

ており、無人かそれに近い子どものための展示はみられなかった。

(2) 特別展における展示の試作・検討

H21年度は特別展「木の洞をのぞいてみれば」において、3つの体験的展示「樹洞であそぼう!」を制作した。特別展のメイキング画像のライドショー。ムササビ他全4種類のぬり絵を行い、持ち帰ってお面を作れる。ムササビの視線で撮影した映像を、着ぐるみを着て見る、疑似飛行体験。作業やお土産は動物観察や生態への関心を導いた。

H22年度は特別展「日本列島20億年」において、日本列島が、異なる時期の付加帯や変成岩体が帯状になったものから成り立っていることを、ダイヤブロックを使って表現し、理解を助ける試みとした。また、日本地図をブロックで表現する体験コーナーを実施した。人を引きつけ、理解を助け、親子のコミュニケーションを促すことに有効な展示となった。

3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している

当初計画していた動物園等との連携が、互いの時間的制約などから遅れているが、それ以外はおおむね順調に行われている。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 他博物館等における“子どものための展示”事例調査とこれまでの調査のまとめ

(2) 当館における“子どものための展示”の実践とその評価

(3) 調査結果の反映(題材、説明、画像・音声装置、手法、照明、色使いなど)

(4) “子どものための展示”展示計画の策定
最終年度の4年目は他館の実例調査を補足程度に縮小し、“子どものための展示”の実践と展示計画の策定を行う。調査結果のまとめ、実践評価の活動は継続して実施する。

研究チーム内では事例調査の報告会を兼ねて、展示手法についての勉強会を開催することで、情報の共有化を図ってきたが、今年度も継続する。同時に自然から何をどう切り取り、どのように伝えるのかについて、分担者や協力者たちと議論し、考え方を共有する機会を多く持つ。

大島・広谷は、「からだの秘密」をテーマに、動物化石・動物標本・生体・生態などをつなぐ・動物園・博物館の展示プランを策定する。

田口・石浜は「水と大地」をテーマに流体・堆積物・環境をつなぐ博物館の展示プランを策定する。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

石浜佐栄子・大島光春・広谷浩子・田口公則・塗り絵をコミュニケーションツールに使った子どものための展示について 2009年度特別展における「ぬりえdeおめん」コーナーの実施報告 ．神奈川県立博物館研究報告(自然科学)39号．査読無．2010．45-52．http://nh.kanagawa-museum.jp/kenkyu/bulletin/39/bull_39-6.pdf

〔学会発表〕(計2件)

大島光春・田口公則・石浜佐栄子・広谷浩子．自然史博物館における子どものための地学展示を考える．日本第四紀学会2010年大会．2010年8月22日．東京学芸大学．
石浜佐栄子．砂の安息角を利用したおもちゃ「玉砂舞楼」～自然の法則の美しさを伝える教材の開発～．日本地学教育学会第64回全国大会．2010年8月22日．鹿児島大学．

〔図書〕(計0件)

〔その他〕

研究報告などの刊行物や過去の特別展の様子は、生命の星・地球博物館のHPで公開中。特別展

<<http://nh.kanagawa-museum.jp/event/tokuten/index.html>>

刊行物

<<http://nh.kanagawa-museum.jp/books/index.html>>

大島光春．子どものための展示を考える．自然科学のとびら．15巻3号．2009．23-24．<http://nh.kanagawa-museum.jp/tobira/15-3/5oshima.pdf>